

狭山池の 水面下には

松本 多加三

狭山池なら知っている！と誰もがおっしゃるけれど、除（よぎ・よげ）を知らない方が意外と多いし、樋にまつわる話となると知らない方が多いようです。

狭山池は①日本最古のため池の一つで、②行基や重源、片桐且元といった歴史上の有名人が改修にあたり、③堺や中河内の大半の田畑を潤す源として知られています。

こんな狭山池周辺に集中豪雨があると、北側の堤防が崩れ、多くの民家が流失する恐れがあります。そこで、大量の雨が降った時にも堤防が決壊しないようにと、水が溢れる前に、早めに水を流し出す場所（簡単に言うと「堤防の切り口」）があります。この切り口のことを除（よぎ・よげ）と言います。この除があることによって、主堤防の決壊が防がれているのです。狭山池の北側には、除が西と東の二カ所にあり、西側の除は非常に大きな切り口となっており、そして、西の除の水を流す川が西除川にしよわがわであり、東の除の水を流す川が東除川というわけです。

さて、もう一つの樋（ひ）ですが、これは下流の田畑に水が欲しい時、必要に応じて水を流す装置です。現在の樋は機械化され、

水の放流を操作することができますが、昔は電柱のような木を水の放流口に詰めていました。外から見ると濡標みづかきのように水中から木の柱が出ていました。

水が必要となった時に、その柱を持ち上げて放流するのですが、しばらく樋を閉じたままにしておく、へド口がたまって柱が持ち上がりません。そこで村の元気な青年が水の中に潜ってへド口をかき分け、村人たちは上で柱を引っぱり続けているのです。

やっと柱が持ち上がり、放流が始まって歓喜の声をあげた時、水の底では力を使い果たした若者が浮かび上るのも精いっぱい、心配して潜ってくる村人たちにやっと助けられるなど、生命をかけた作業が行われていたのです。こんな言い伝えを持つ池が河内や和泉にはいっぱいあったようです。

このように、今は知る人も少なくなった除や樋の歴史を持つ狭山池ですが、今では安藤忠雄氏設計の巨大な狭山池博物館が無料で開放されていますし、春には周囲一面の桜の名所として知られるようになってきました。行基や重源を調べると、もっと面白い歴史が見えてきますし、池の東に屋敷を構えていた殿様・北条氏の歴史を調べても面白い歴史が見えてきます。

朝日や夕日に照らされる狭山池の水面は美しいけれど、その底にはもっと味わい深い歴史が眠っているようです。